

図書館友の会 ニュース

発行 岸和田市図書館友の会 《発行責任者 松谷 敬一》

2020年
7月号

No. 16

図書館友の会



総会&落語会は8月7日(金)に開催

午後1時～3時30分 3階視聴覚室

6月6日(土)に予定していた総会&落語会は、コロナ禍の影響で延期となり、8月7日に開催されることになりました。(総会は午後1時から)

落語会は2時から始めます。今年も千里亭だし吉さんと食育亭卯舞さんがそろって来てくれます。会員でない方も参加できますので、ぜひいっしょに笑い合いましょう。《図書館への申込みは不要です》

図書館から 岸和田ルネサンス を

思ってもいなかった新型コロナウイルスの感染拡大、「緊急事態宣言」発動による営業や外出の抑制…。ようやく「緊急事態宣言」も解除され、日常が徐々に取り戻されてきていますが、今年の秋から冬にかけて第2次感染が広がる恐れがあるとされています。しばらくの間は「コロナ」と向き合って過ごさねばならないのでしょうか。

このような時期、「図書館友の会」は何ができるのかを考えてみました。今月号では、新型コロナウイルスに関する記事(2面)や、奈良時代に広がった感染症を小説化した『火定』(澤田瞳子著)を紹介した会員の感想文(4面)も掲載しました。ぜひ、お読みください。

さらに歴史を振り返ると、人類は過去何度もこのような感染症に出会い、それが契機になって人々の意識が変わり歴史を転換させることもありました。13世紀にヨーロッパでペストが大流行した後は、「イタリアを中心にルネサンスの最盛期を迎え、それが近代社会の幕開けにもなった」とも言われています。

それなら、岸和田でも「ルネサンス」と言えるような市民文化の新たな再生・創造が起こらないだろうか…。そんな夢を抱きながら、今回、この『友の会ニュース』と併せて『図書館から岸和田ルネサンス』の第1号・第2号・第3号もまとめて発行しました。「友の会」の会員が、コロナ禍の中で読んでみて「参考になった」と思った本を、感想等も交えて紹介するために書きまとめたものです。図書館に置いてもらっていますので、この「友の会ニュース」と併せて、ぜひ読んでみてください。

図書館にはあらゆるジャンルの図書や資料があります。「友の会」としても、できるだけ幅広いジャンルの図書を紹介できればと思いますが、微力なので自信はない…。まあ、今後もしばしばと不定期で順次発行しますので、よろしくお願ひします。

新型コロナウイルスの起源とヒトへの感染

図書館友の会には多彩な会員が加入しています。運営委員の杉原富人さんもその一人。生物学の専門研究者です。新型コロナウイルス感染症の初発例が報告されてまだ7ヶ月。わからないことがたくさんありますが、杉原さんは世界的権威のある『NATURE』などに掲載されている最新情報にも眼を通し、研究されています。

そこで、「新型コロナウイルスのことについて書いていただけないか」とお願いしました。できるだけわかりやすく書いていただいたのですが、専門知識がない私たちには、やはり難しい…。そこで、その要点だけを紹介することにしました。

本文は、別に印刷し図書館にも置かせてもらうようにしましたので、詳しく知りたい方は、その別冊をご参照ください。

WHO（世界保健機関）は今回のウイルスを SARS-CoV-2 と命名しました。また SARS-CoV-2 で引き起こされるウイルス感染症を「2019 年新型コロナウイルス感染症 COVID-19」と命名しました。別冊では、次の3つの視点から COVID-19 が世界中で感染爆発に至った秘密を解明することを試んでいます。

- ① なぜ、新型コロナウイルスはコウモリ起源なのか？
- ② いかにして、新型コロナウイルスはヒトに感染するようになったのか？
- ③ 何によって新型コロナウイルスはヒトに感染し、感染爆発したのか？

● 今後も新種のコロナウイルスによる感染爆発が発生？



マレーセンザンコウ（出展：AP）

新型コロナウイルスには一本鎖 RNA の遺伝子総体（ゲノム）があり、これは重症急性呼吸器症候群（サーズ）コロナウイルス、センザンコウ-コロナウイルス及びキクガシラコウモリ-コロナウイルスと 74.5%~99%同じです。入手可能な情報によると、新型コロナウイルスはコウモリに由来し、おそらくセンザンコウを中間宿主として使用してヒトに感染した**組換えウイルス**であると推定されます。

新型コロナウイルスのヒト細胞に吸着し結合するスパイクタンパク質と、ヒト ACE2（アンジオテン

シン変換酵素 2）受容体との相互作用、およびその後のタンパク分解酵素と融合による切断は、このウイルスが宿主細胞に侵入し感染する際のポイントになります。

新型コロナウイルスが、中間宿主の可能性が高いセンザンコウを介して、コウモリとセンザンコウの両方に由来する組換え「複合体」ウイルスとしてヒトに感染するようになったことが示されました。このことは、次のことを示唆しています。

すなわち、世界中に（私たちがよく知らない多くのコロナウイルスも含めて）無数のコロナウイルスが存在しており、いくつかの生物種は、ウイルスが新たな遺伝的組み合わせを作成する“実験室”のように機能していることです。従って将来も、今回とは異なる新しいコロナウイルスによるヒト感染爆発が発生することが予想されます。

【編集者の感想】 ということは、気候変動に伴う近年の自然災害の増加と同じように、今回の「コロナ禍」が終息しても、また新たな感染症が広がる可能性があるということかな？ そうだとすれば、ウイルス感染が広がる根本的な原因＝ヒト社会のあり方も見直す必要もあるのかなあ…。

※ 『図書館からルネサンス』第2号は、『感染症と「ヒト社会」のあり方』を考える本を紹介しています。

● 重症化するの、自己免疫による炎症が原因？

新型コロナウイルスの発症例の特徴は、感染しても約 80%は無症状か軽症で経過するが、高齢者を中心に約 15%は重症肺炎となり、約 5%は致命的な急性呼吸促迫症候群になっていることです。

新型コロナウイルスが重症化を引き起こすのは、ウイルス自身が原因というわけではなく、自己免疫によるサイトカインストーム（嵐）が、肺をはじめとした複数の臓器で炎症を引き起こし、また血栓を形成して、患者自身を死に至らしめると考えられています。この点から、「新型コロナウイルスは、サイトカインストーム症候群」と特徴づけることができます。

【編集者の感想】 重症化するのウイルスの毒性が強いということではなく、ヒトの自己免疫機能に混乱をもたらすことが原因ということかなあ。だったら、免疫機能ってどうなっているのか。少し勉強しないとわからないなあ…。

※ 杉原さんは、『図書館から岸和田ルネサンス』第 3 号で免疫関係の本も紹介しています。

地名の秘密 ⑭ 【針中野（はりなかの）】

針治療院の名前が地名と駅名に。なんともユニークな地名

大阪市の阿倍野区から奈良の橿原神宮を結ぶ近鉄南大阪線に「針中野」という一風変わった名前の駅がある。東住吉区のほぼ中央にあり阿部野橋駅から藤井寺行き普通電車に乗ると 4 つ目の駅。1923 年（大正 12）近鉄南大阪線の前身である大阪鉄道が「道明寺駅～天王寺駅」を開通させたとき、ここに駅がつくられ針中野という、すこし変わった駅名がつけられた。

近くで開業している中野鍼療院に由来する。この中野鍼療院は平安時代の延暦（782 年～805 年）の頃に開かれた。「中野降天鍼療院（なかのあまくだるはりや）」がその屋号。ともかく老舗である。駅から東へ約 3 分歩いたところに、江戸時代を思わせるような古い屋敷があり、ここが中野鍼療院で、弘法大師から身体のツボを示す像と針を授かって開業したという謂れを持つ。古くは「中野鍼まいり」といって、患者が遠方から治療を受けに訪れたという。江戸時代の地誌である『摂陽群談』にも、当地の名所として記載されている。大阪鉄道がこの地に電車を走らせようとしたとき、この中野鍼療院は地元活性化のため、この一帯の土地を寄付して鉄道開通に尽力した。そこで大阪鉄道は「針中野」という名前をつけたのである。この地域はかつて平野川の中流に位置していたことから中野と呼ばれ、江戸時代には平野郷を構成した 7 町 4 村の一つであった。1980（昭和 55）年に中野通、湯里町、東鷹合町などを合併したときに、町名を駅名と同じ針中野とした。

駅名だけではなく、地名も鍼療院が由来となった珍しいケースである。中野鍼療院は現在も開業しており、鍼療院の近くには「はりみち」「でんしゃのりば」と刻まれた石碑が建っている。「でんしゃのりば」は南海平野線が開通していて、そこに駅があったが、のち廃線となり、そのなごりである。

全国に変わった地名は多いが、個人が経営する鍼療院の名前が、地名と駅名になっているのはここだけだろう。

【文責】文章教室 浦田榮二

* 参考資料 『大阪地理地名地図の謎』 谷川彰英監修 実業の日本社

奈良時代の感染症を扱った歴史小説『火定』を読んで

昨年12月、中国より新たなウイルスが発生したとの報道があった。数年前流行したSARSに似た状態になるのではないかと心配が広がりだし、国内でも次第に報道が増えてきたと思っていると、大型クルーズ船からいきなり感染者が報告され、一気に関心が注がれる様になった。患者が増加し、日本中がパニック状態となり、政府の対応も後手後手と、又都道府県もその対策に追われる様になった。世界中移動が可能な現代において、あっという間に蔓延するのは火を見るより明らかである。

歴史上、この様な伝染病は何度も発生しているが、近いものでは大正時代のスペイン風邪、日本史に現れる古いものでは、奈良時代聖武天皇在位の時に天然痘が流行し、大勢の人が亡くなっている。

その時代の人々は、何か悪い病気が流行っていることはわかっていたようであるが、今のようによく解る世では無かった時代、何か起こっているのかわからず、それでもその時代の医師、薬師達が必死に治療にあたっていたようだ。そのあたりの事情は小説「火定」（澤田瞳子 PHP 研究所）に描かれている。

小説ではその病は新羅から帰国した使節がもちかえり、平城京で流行し、やがて太宰府にもひろがったと描かれているが、史上残されているものでは、天平6年(734)、遣唐使が帰国した翌年、太宰府から広がったウイルスが、京(平城京)にもたらされ、全国に蔓延し、庶民だけでなく、時の政府の天井人たる権勢を誇った藤原四兄弟はじめ、要人達も亡くなったとされている。このことから、聖武天皇が大仏造立へと思立ったと言われている。

一方、市井の人々は、慌てふためき、流言飛語に惑わされ、祈祷やまじない札に飛びつき、外国からの渡来物を排斥するというような事に走ったようである。この病は人口の30%近くの死亡者を出し、終息に4年もの年月を要した。現在、幸いにも天然痘は地球上から駆逐されている。願わくば、この新型コロナウイルスが一刻も早く終息されることを祈るばかりである。

「友の会」運営委員 山田 和彦

今年の図書館友の会「文学歴史散歩」は高野山の予定

予定日 11月13日(金) 8:30 図書館本館集合



奥の院 明智光秀墓所

本年の「文学歴史散歩」は高野山金剛峰寺と奥の院を訪れます。高野山の奥の院にはNHK大河ドラマ「麒麟が来る」の明智光秀の墓をはじめ、戦国武将の墓があります。

また、高野山は2004年(平成16年)7月に登録されたユネスコの世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』の構成資産の一部です。

* 詳しくは10月号に掲載します。また、新型コロナウイルス感染症の関係で中止する場合があります。